

編集後記

▼お待たせ致しました。「現代宗教研究」第四十二号をお届けします。

▼平成十九年四月十一日、現宗研顧問（前所長）久住謙是上人が遷化されました。謹んで増道損生をお祈り申し上げます。久住所長時代に主任としてお任せされた伊藤立教師による追悼文を掲げさせて頂きました。平成十四年に石川教張元所長、翌十五年中濃教篤元所長、そして久住所長と、研究所を草創期から担って来られた方々を次々と失い、現宗研が転換期に差し掛かっていることを予感させられます。先師の遺志を継承しつつ、新たな現宗研を、と念じております。

▼立正平和運動は、それこそ現宗研創設以来の基本プロジェクトですが、時代状況の変遷もあり、如何に再活性化するかが問われていると言えるかと思われます。田澤所長が「宗報」平成十九年七月号に、三好龍孝師の論文を踏まえて書かれた「教化学へのアプローチ―三好達治の詩からみた戦争責任と平和憲法」は各方面から反響を呼びました。当該論攷ならびに三好師の教化学研究発表

大会特別発表に是非御注目下さい。

▼反響を呼んだと言えば、「宗報」に掲載されていた、伊藤立教前主任の「現宗研の時事ノート」での、ヒット曲「千の風になつて」に関する考察は、朝日新聞等のマスコミが言及するところとなりました。教化学研究発表大会の際、師自身により総括をお願い致しました。他、教化学研究発表大会の諸師の論攷を、本年も「教化学論集」として別冊とはせず、本所報に収録致しました。

▼教団論研究セミナー公開講座は、『お寺の経済学』の著書で知られる慶応大学教授中島隆信氏による講演「お寺は生き残れるか」です。中島教授は、お寺の在り方を「観光寺」「信者寺」「檀家寺」に三区分して、意外にも（？）、「檀家寺」たることの大切さを説いています。もちろん、教授の言うところの「檀家寺」となるのは簡単ではなさそうですが。「教団」というものは基本的にトップダウン式とボトムアップ式があり、日蓮宗の教化活動をして行く上でどちらが望ましいのかを考えなければならぬ。「お金が動いている以上、宗教性、非営利性、公共性を証明するには料金を提示しないこと」等々の示唆に富んだ

重要な指摘が随所に見られます。

▼中央教化研究会議での、社会学者宮台真司氏（首都大 学東京教授）の基調講演「『正しさ』の不可能性と現代宗教」を収録しました。同時に、現宗研でのミニ講演「宗教者が平和運動を行う意味」をも採録いたしました。詳しくは「宗報」平成十九年十二月号の拙稿「現宗研だより」に譲りますが、後者を総論編、前者を各論編としてお読み頂ければ、宮台教授一流の宗教社会学と「正しさの不可能性」を御理解頂けるのではないかと思います。さて、我々はそれを踏まえてどう「立正安国」を伝えるのか。本宗の若き俊英が宮台教授に挑んだ中央教研のパネルディスカッションと、分科会報告にも御注目下さい。

▼研究ノートは主に「研究例会」にて発表された、研究員諸師の、各々の研究課題に対するそれぞれの成果です。各人各様の方法と観点による研究ではありますが、いずれも日蓮宗の教化学ということを念頭に置いて書かれたものです。

▼研究調査プロジェクト報告は、別項に記載しましたプ

ロジェクトチームによって研究調査項目を分担した成果の一部です。平成十九年度の研究調査項目ならびに分担は、原則として平成二十年度へ継続し、そこで一往の取り纏めを行う予定です。従って、本年度の報告は、研究調査途上での中間的なものであったり、派生的なものであったり、項目によっては報告を省略している場合があります。

▼日蓮正宗の佐渡塚原跡碑問題については、前号に引き続き、小瀬研究員による詳細な研究調査報告を掲載致しました。

▼黒木報源師によるミニ講演は、小樽問答の余波でもあり、本宗現代史の一頁である宮崎県の大日蓮宗について、地元の俊穎に講じて貰ったものです。尚、平成十九年度の研究員の調査研修として、黒木師にガイドをお願いしながら、旧大日蓮宗の寺院を巡拝致しました。

▼別欄に記しました通り、所員二名が伝道部に移籍、教務部からの転任一名と新人二名を加えて、現宗研の平成十九年度はスタートしました。更に、年度半ばに五年十ヶ月に亘って主任を務められた伊藤立教師が退任さ

れ、筆者が後任となりました。というような次第にて、今年度は所内人事に大きな動きがありました。新たな体制、と言うよりは、主任が一番の新米という状態での模索を続けております。各位の御教導御鞭撻をお願い申し上げます。

（高佐宣長）